

令和3年度

オンライン講座

第18回

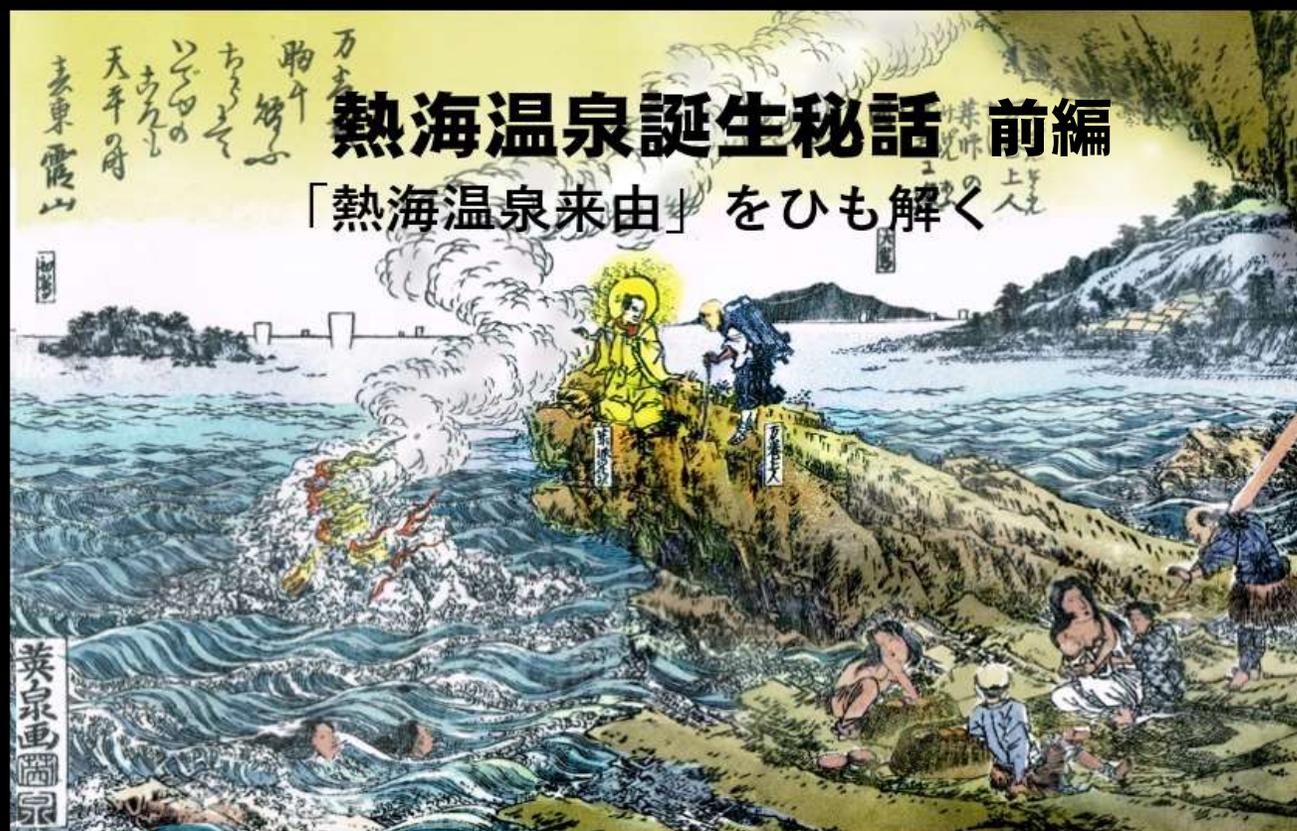
まちづくり
III

18

2021
12月
No.18

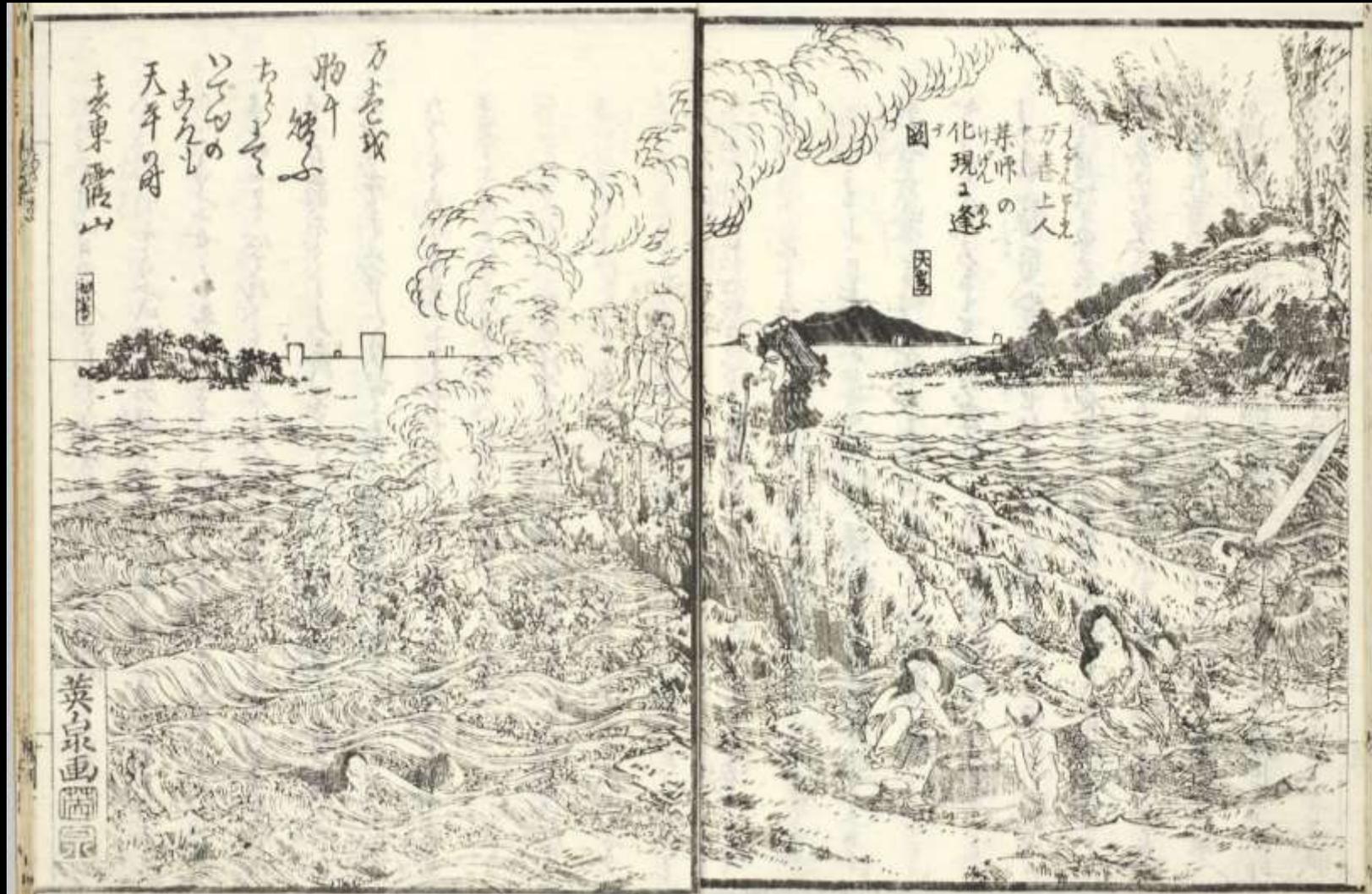
熱海ブルーノ・タウト連盟

タウト塾@熱海



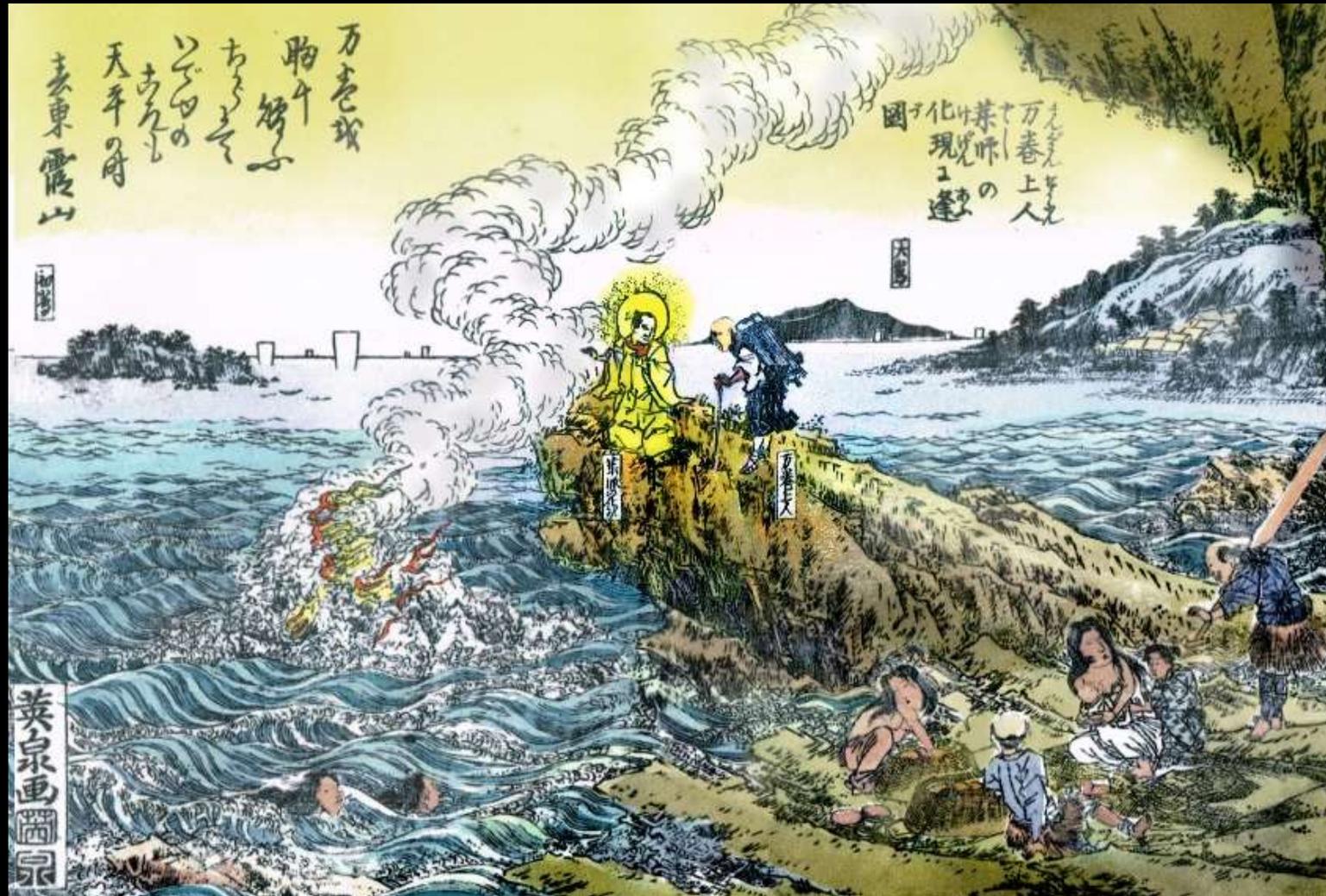
熱海温泉誕生秘話 前編

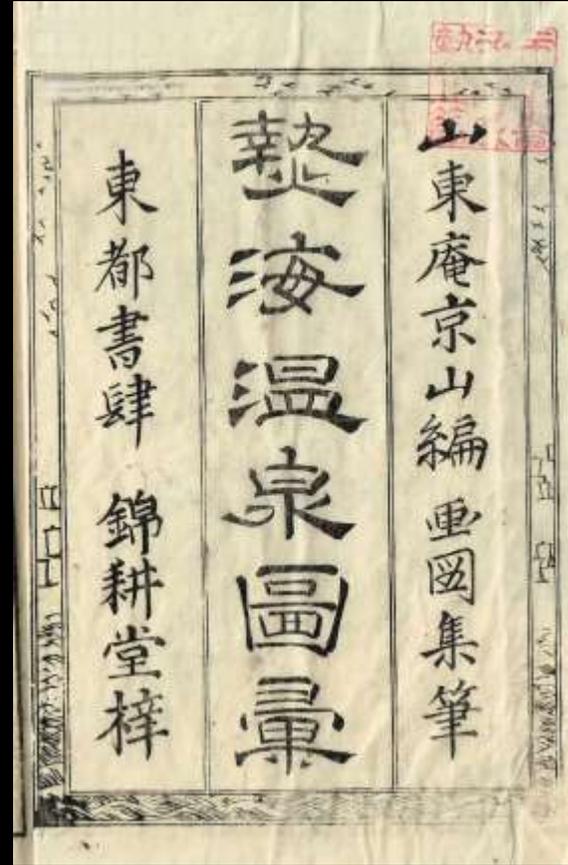
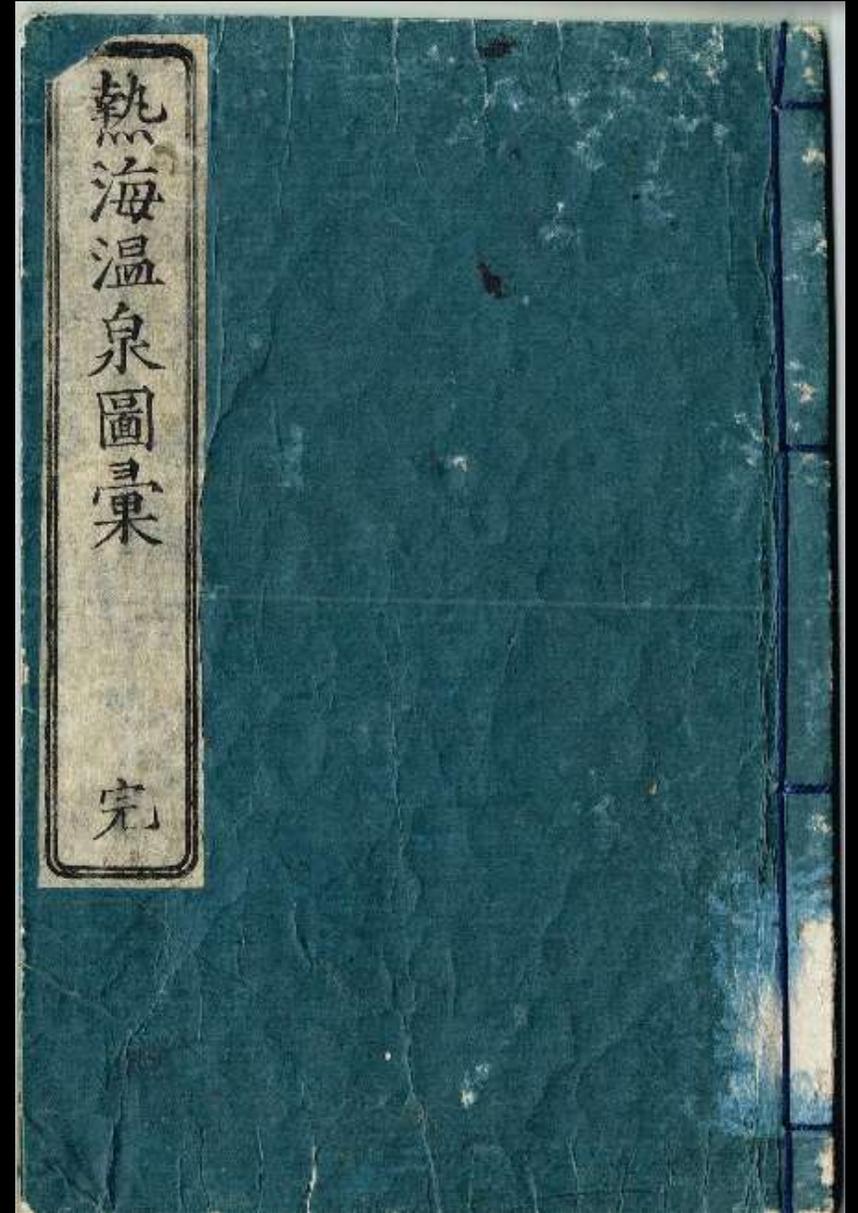
～「熱海温泉来由」をひも解く～



熱海温泉誕生秘話 前編

～「熱海温泉来由」をひも解く～





熱海温泉カシハ由来シヨ

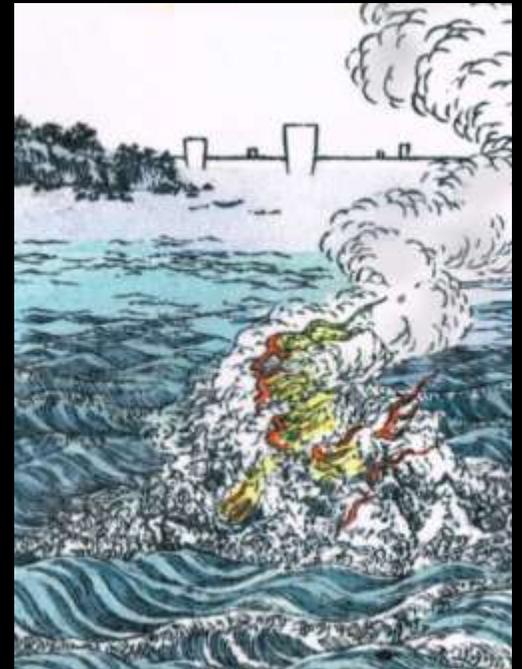
熱海温泉由来
博多の温泉は凡そ石硫黄を多く含みその水味は白くわづ温るると
よふ三奉記の輜の温泉は権人かろを得たりかまひ及ぶそのあふ
力の疾を去るといふ張衡の温泉の賦に云ふ諸君散見する唐土の
温泉枚考をよむ我朝温泉は少く病を療治する者少く是れ命を
權聖にせざるは海温泉は八三十五代仁徳天皇の御座り小あんで外西
の海に温泉の心は湧湧て烟氣海中なるを熱湯と云ふ煙と
死より臭の類岸小吹き悪臭かなとて人跡をなすは少く是れ
を歴て入王三十九代天智天皇の天平元年の頃捕獲みまわ松の山あり
日よ方廣徑を謀る方巻ふり改人呼んで方巻上人といふを尋ね
鹿嶋郡那志保のふき熱海海上に泉を掘りて湯のちよ煙り

熱海市立図書館蔵 ぶらタモリでも紹介されている



万巻聖人薬師の化現と逢図

奈良の時代、熱海の海中は沸く熱湯によって魚類が死んで、甚大な被害を被っていました。それにより困っていた漁民たちの訴えを聞き、箱根の万巻（まんがん）上人は、祈願によって泉脈を海中から山里へ移しました。



万卷聖人

『箱根山縁起』によれば、万卷にも及ぶ經典を読んだので万卷（萬卷）と称され、日本全国の靈場を巡行しました。

また箱根三所権現（法躰・俗躰・女躰）を感得。箱根神社を建立し、芦ノ湖に住む9つの頭を持つ毒龍（九頭龍）を法力で調伏。九頭龍神社を建立しました。



薬師如来

薬師如来は、人々の現実的な願い事を叶えてくれる、人間に親しみ近いところの仏様で、人々を救いたいという現世での利益を表した姿です。

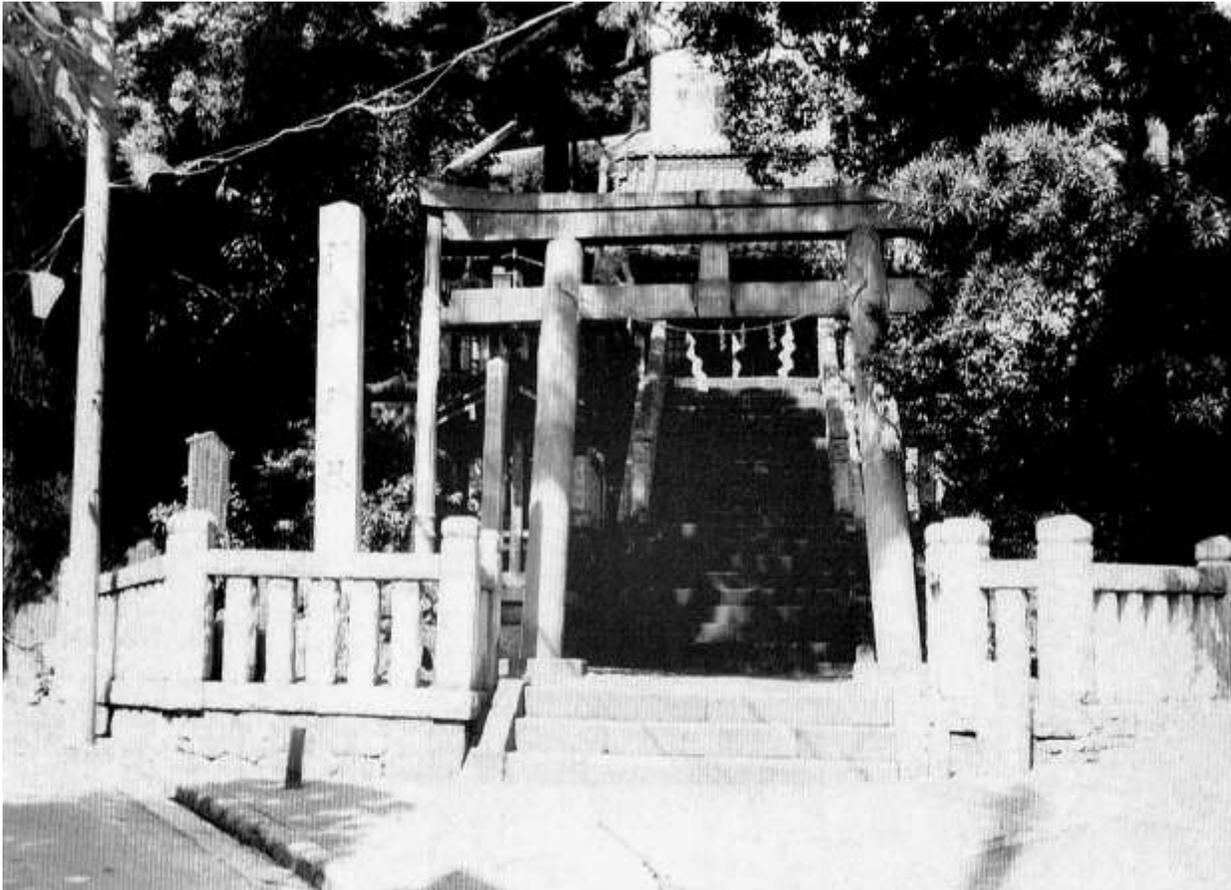
薬師如来は、仏様になる前の修行の身、12の誓願をたてていますが、その一つにどんな病気も治すというのがあります。

また、衣食を満たす、悩みを解決する、地獄へ落ちないように導いてくれるというのがあります。

薬師如来は、このような現世的な願いをかなえ、病氣平癒（へいゆ）の功德で信仰されています。



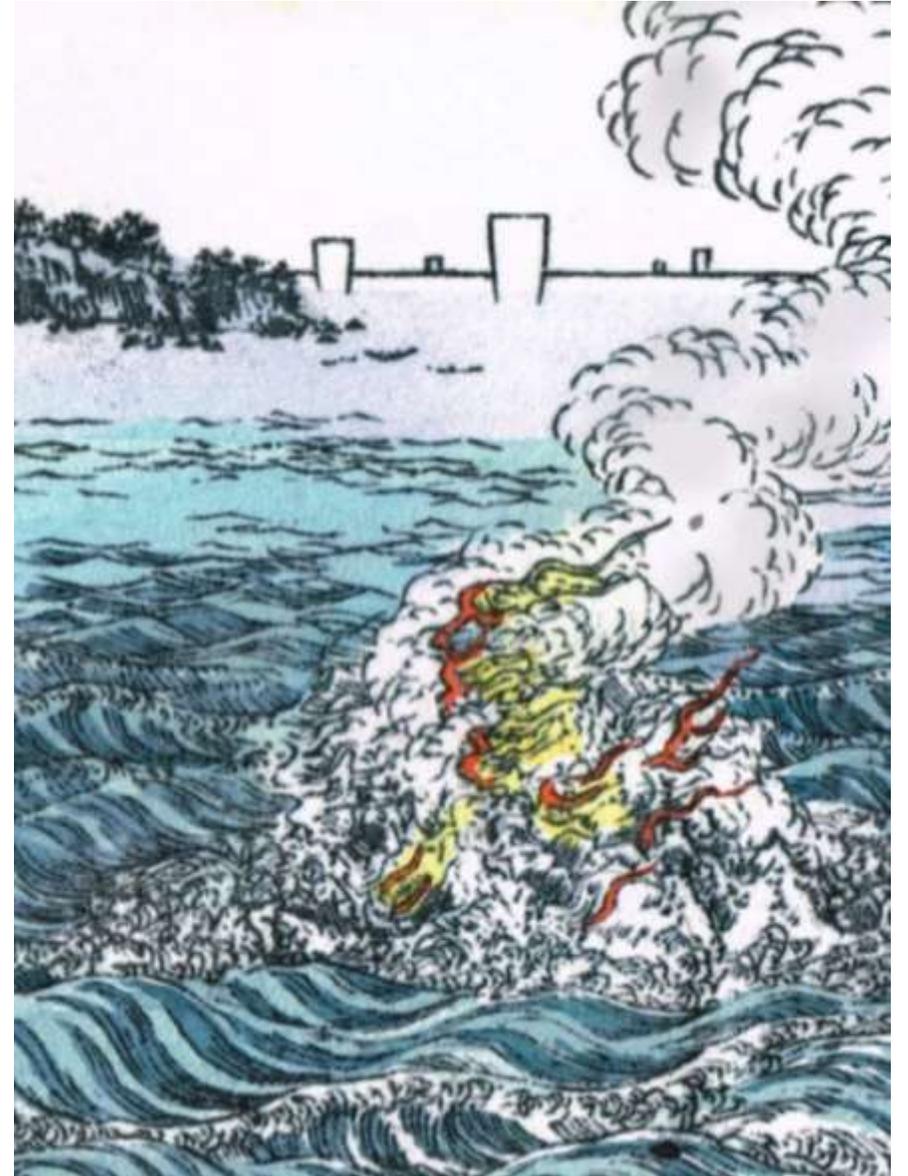
湯前権現（現・湯前神社）



神様から「病を除く効果がある温泉がある」とお告げがあり、「この前にお社を建てて拝めば、現世も病を治す、来世も幸せに暮らせる」と人々に説いたと伝承されています。この源泉が現在の大湯であり、そのお社は薬師如来と少彦名命（すくなひこなのみこと）をお祀りしこの地の守り神としました。これが湯前権現（現在の湯前神社）であるといわれています。

あたま “熱海” “名の由来

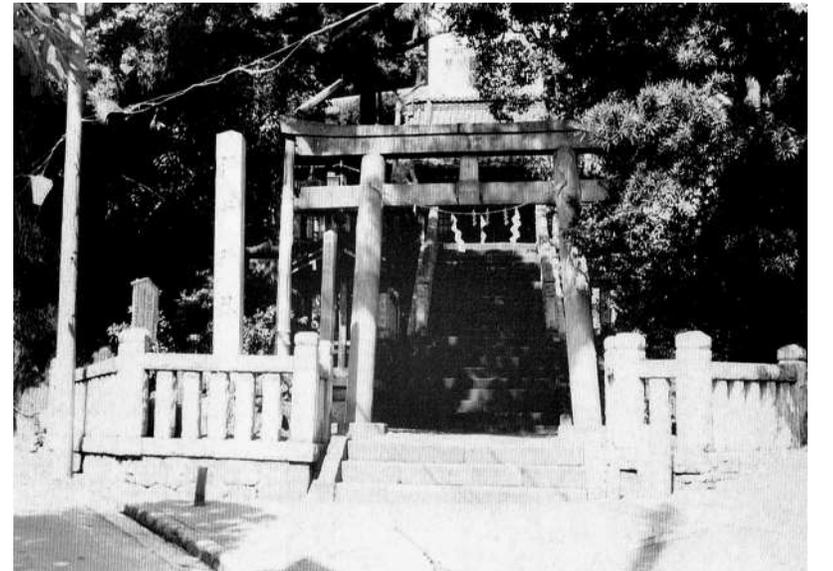
「熱海」と書いて「あたま」と読むこの地名の由来は、海中より温泉が凄まじく沸きあがり、海水がことごとく熱湯となったため、「あつうみが崎」と呼ばれ、それが変じて「あたま」と称されるようになったと言われています。





大湯・少彦名命・湯前神社

「あつうみが崎」より陸上へと移動した温泉。大地の呼吸であるかのような間歇泉「大湯」に温泉の神・少彦名命をまつり、湯前神社が建立されました。



大湯間歇泉



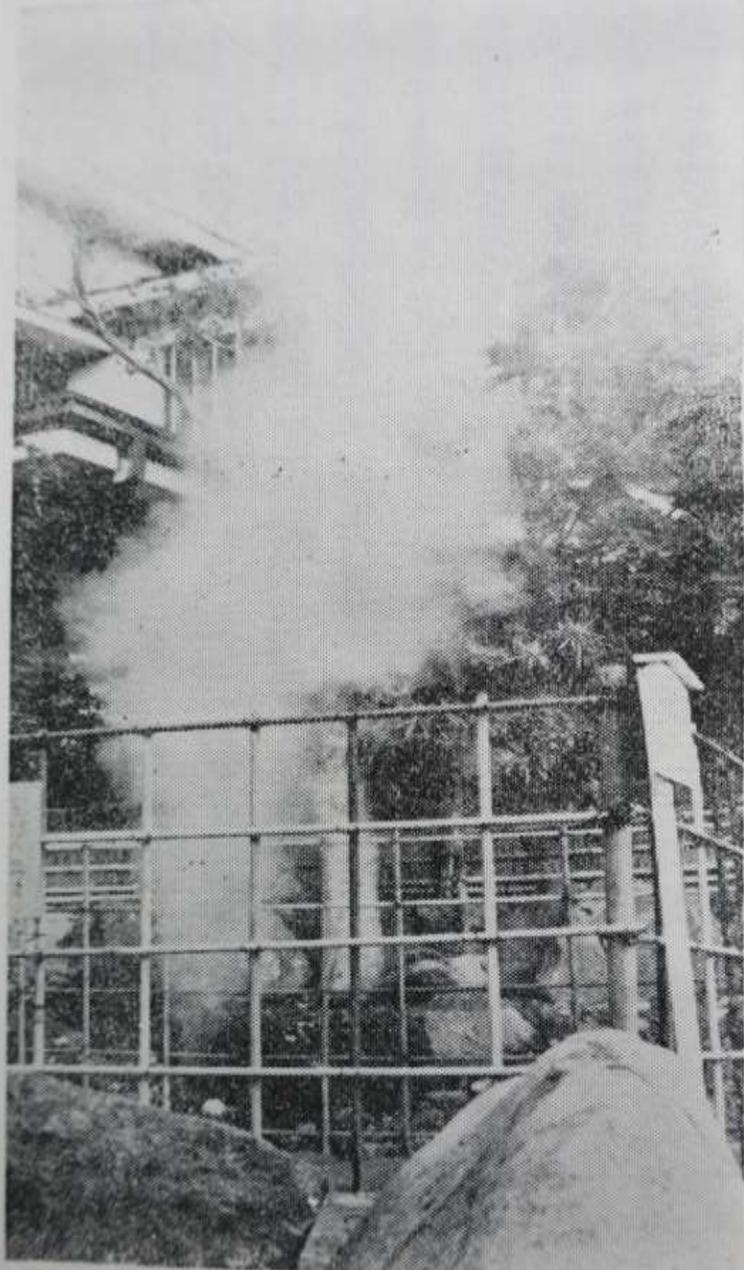
かつての「大湯間歇泉」は、自噴泉で昼夜6回あり、湯と蒸気を交互に激しい勢いで吹き出し、地面が揺れるようであったといわれています。
明治中頃から次第に減少し1923年（大正12年）に止まってしまいました。

大湯間歇泉

熱海に間歇泉があることを示す例として、1330～50年頃、中世の禅僧・中巖円月(ちゅうがんえんげつ)の漢詩の一節があります。

「夜半に夢から覚めると琅琅(ろうろう)と響いてくる、それこそは岩根から熱湯の湧き出づる音、たくさんの笕(かけい)で伝え分けた湯から立ち上る湯煙が家屋を取り巻き、家々に浴室を備え、客が房室を借りて宿っている」。

噴出回数が減ってしまった間欠泉の復活時



復活した大湯間歇泉



湯前神社

「病を除く効果がある温泉がある」と神様からのお告げで祠を立て、神を祀ったのが始まりの神社。熱海の温泉に感謝し、泉脈が絶えないようにと春と秋には例大祭が開催されています。湯前神社は全国各地に祀られています。

少彦名命

少彦名神は、玉造温泉、道後温泉、箱根の元湯温泉の発見者。温泉の神として、全国に祀られている小さく、腕白な神さまです。しかし、行う事は大きく多彩、大国主神と一緒に国作りをすることから多くの神格をもちました。

小の象徴

商売
交易
酒
物神



国造り

薬

健康 温泉



ヒポクラテス

協働

医療
漁業

縁結び

安産・育児

農耕神



熱海の原点... 湯前神社・少彦名命 ... 多様な神格・キャラクター

一寸法師の原型 少彦名命



小さなガガイモの実の舟に乗り、蛾（ひいる・が）の皮の服を着て常世の国からやってきたユニークな神です。この事から、お椀の舟に乗って川を下る一寸法師の話を生み出されたといわれています。

一寸法師

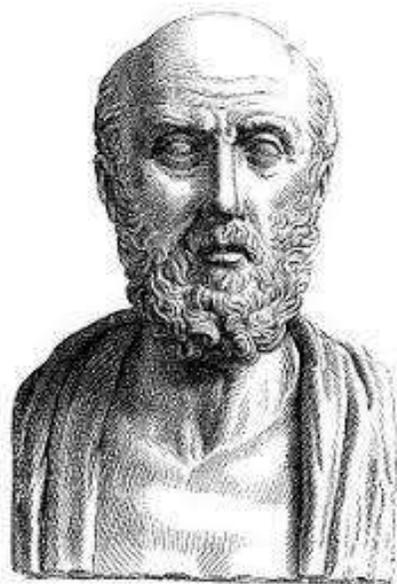
少彦名命は「小」の象徴！
一寸法師をはじめとして、全国に様々な姿で点在しています。

一寸法師の他には、すねこたんぱこ、あくど太郎（あくとは踵）、豆助（親指）、指太郎（生まれた場所を表す名）、豆一、五分太郎（次郎）（小さいことを表す名）、三文丈、一寸小太郎、タニシ、カタツムリ、かえる、アイヌのコロポックルカムイ、キジムナー、ケンムンなど、多く親しまれてきています。





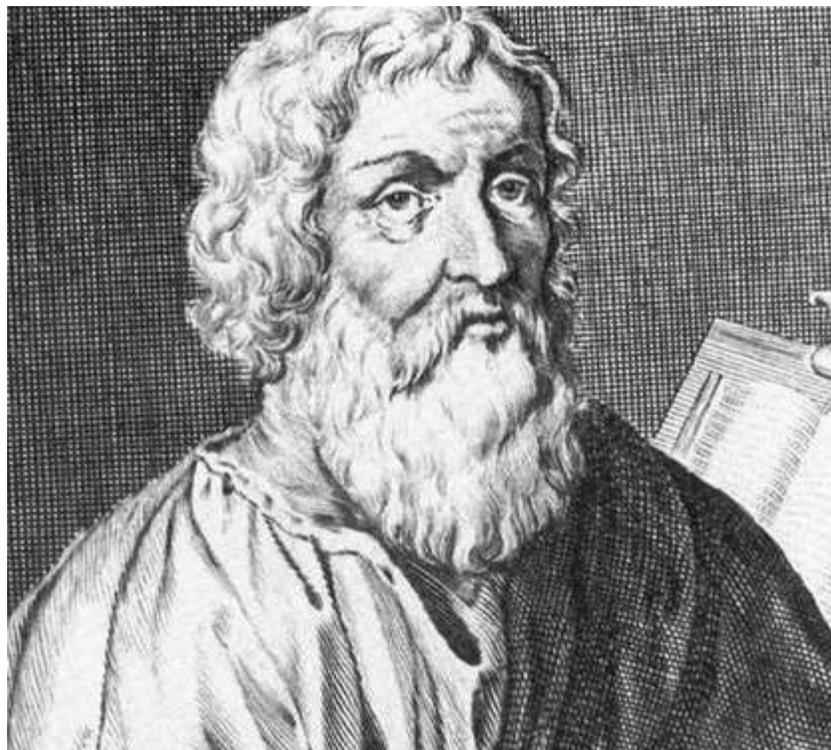
少彦名命 と ヒポクラテス



…丙戌（明治19年）4月、茂木氏が梅園を熱海村に造るや、その西邸に古い山の神の祠があった。横浜の医士近藤良薫君、茂木氏と来過、その祠の年を経ること久しく、将に倒れようとするを視て、遂に工理（たくみ）に命じて之も新しくした。また、合祀するに。湯の神と泰西（たいせい）の医祖・依ト加得斯（ヒポクラテス）を以てした。蓋（けだ）し、梅園の設備あり、以て身を調攝する。…（碑より抜粋）



ヒポクラテス



A.C460年頃 古代ギリシャの医師。
医学の父、医聖、疫学の祖

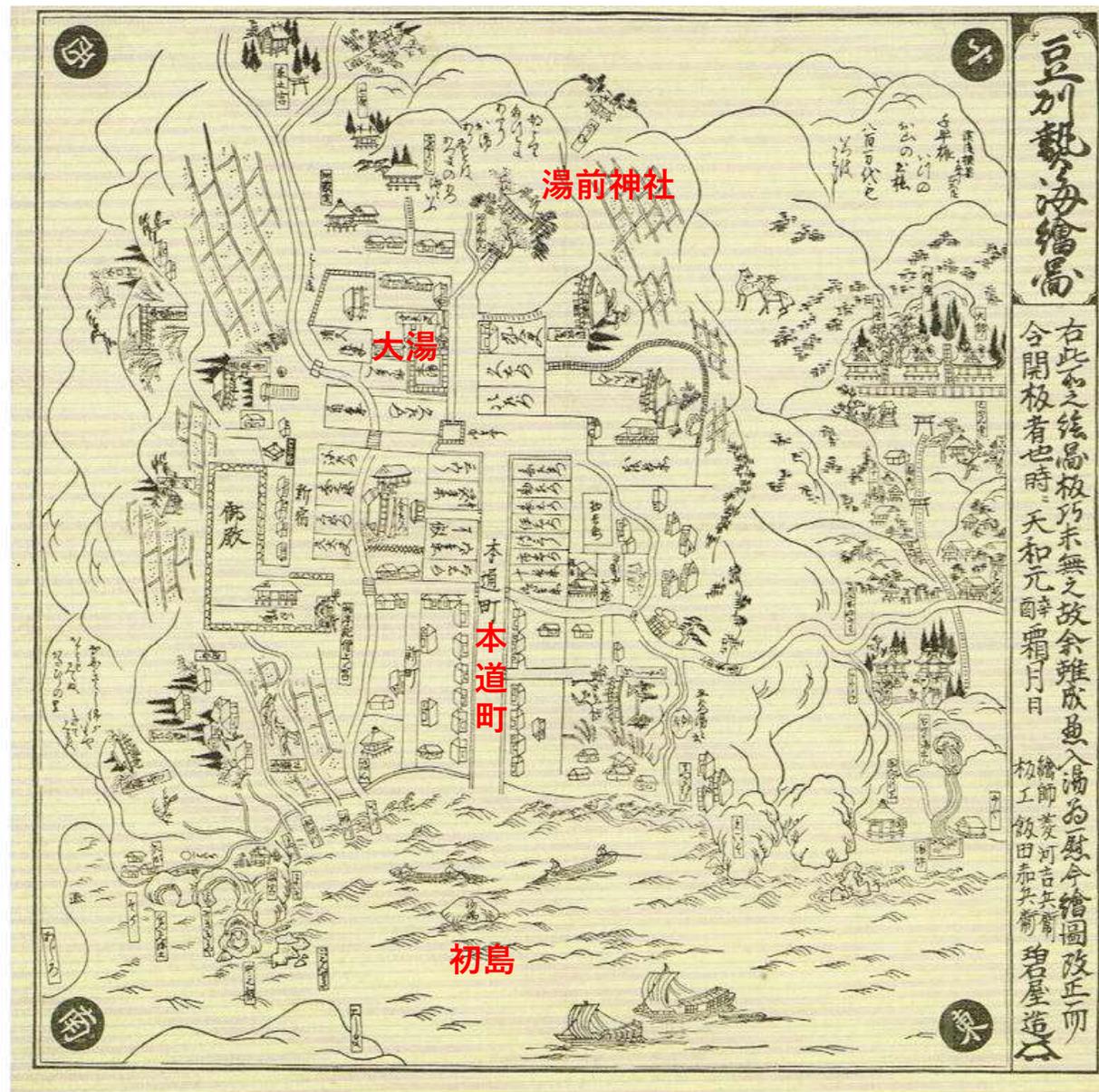
温泉の神・少彦名命と医学の祖・
ヒポクラテスとの合祀の証は、
熱海温泉の発展において大切な力
です。

温泉の効果を利用したクアハウス
（温泉治療館）が日本にも広まり
ました。ですが熱梅には百年前に
噓氣館が完成し、間欠泉の大湯の
蒸気を館内に導いて吸わせ、胸部
の疾患を治療していました。

湯治場の始まり

大湯－湯前神社－湯升－本道町－海岸
初島を眺望しまちがつくられ、
湯治場がとなっていた。

熱海郷の「湯治場」は戦国時代から徐々にはじまりました。
湯前神社を中心に湯宿が形成され、大湯はまさにこの中心でした。江戸時代にみられたような熱海温泉町の景観の基本はこの戦国時代にほぼ形成されていたと考えられています。



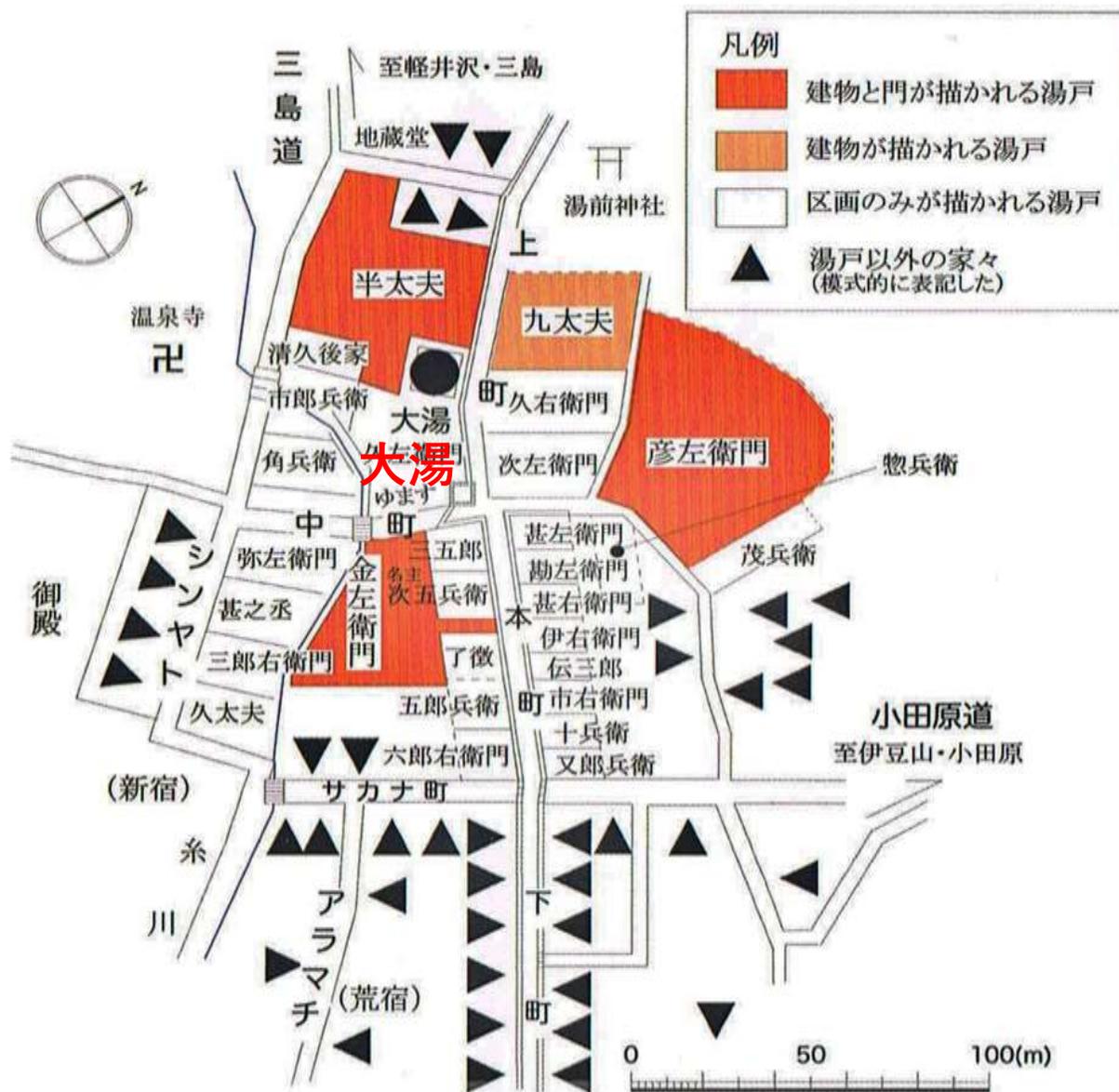
豆州熱海繪圖〈1681(天和元)年〉

近世の熱海温泉を描いた現存する最古の絵図といわれている

大湯の分湯

湯戸制度

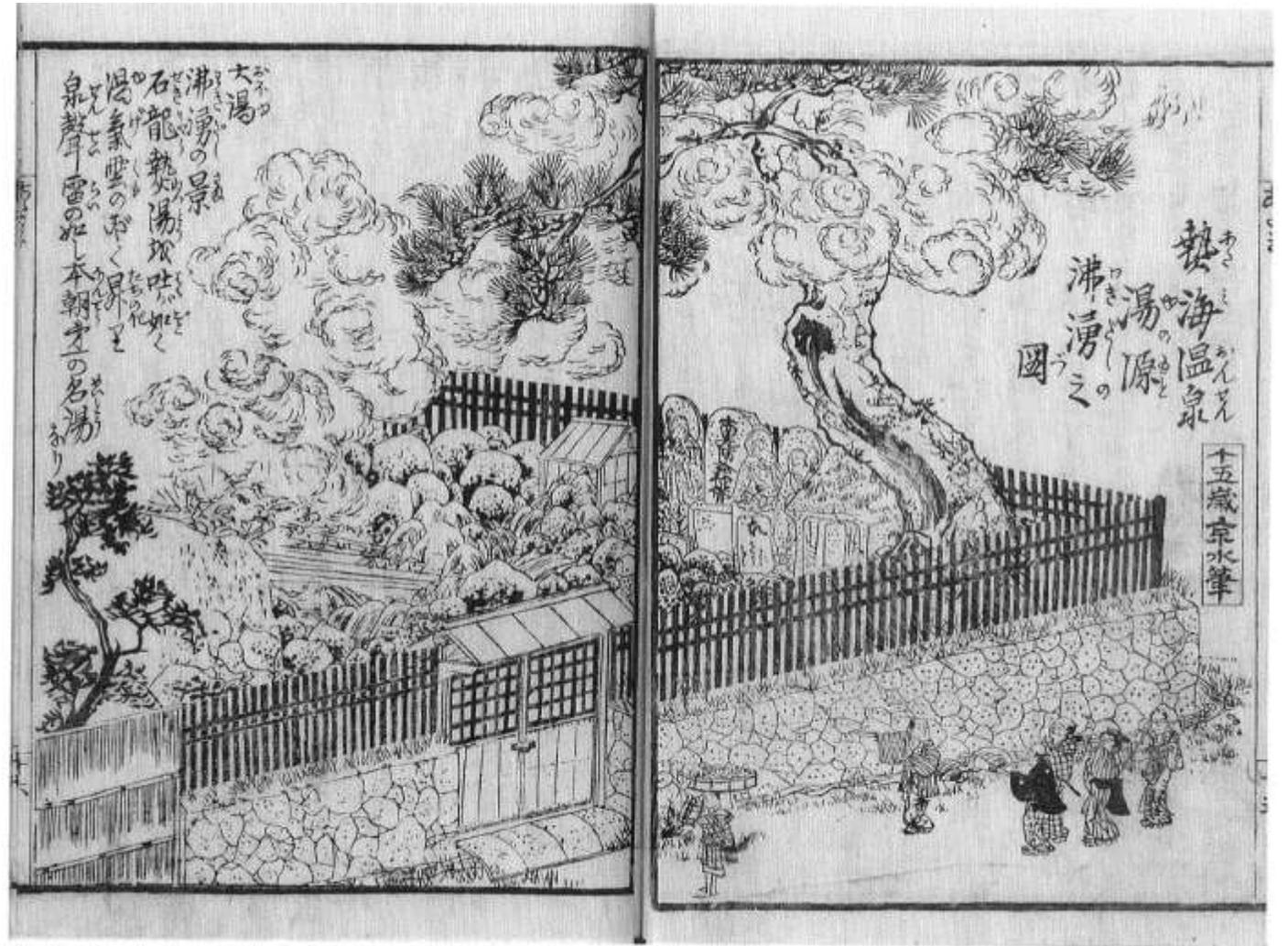
近世熱海の温泉宿は、基本的に大湯を引湯して営業する湯戸（湯宿・湯亭）のみで、これらは大湯周辺に密集して立地していた。



熱海七湯

熱海村における大湯以外の温泉源は、清左衛門湯・平左衛門湯・風呂の湯・水の湯・野中の湯・佐次郎の湯・河原湯を、「熱海七湯」と呼ばれていました。

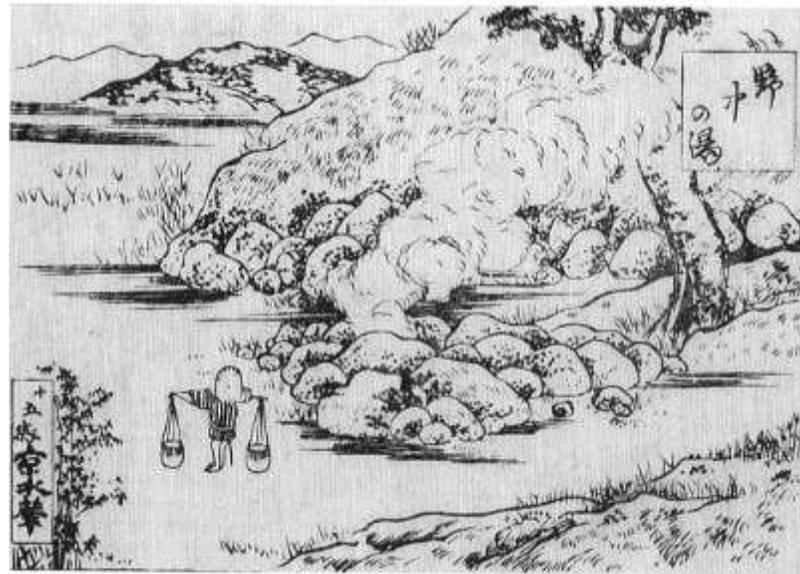
資源としての温泉利用をめぐることは、大湯の温泉宿営業者集団の「湯戸」の立場の本陣である今井家・渡辺家らの名主や村方三役をつとめました。



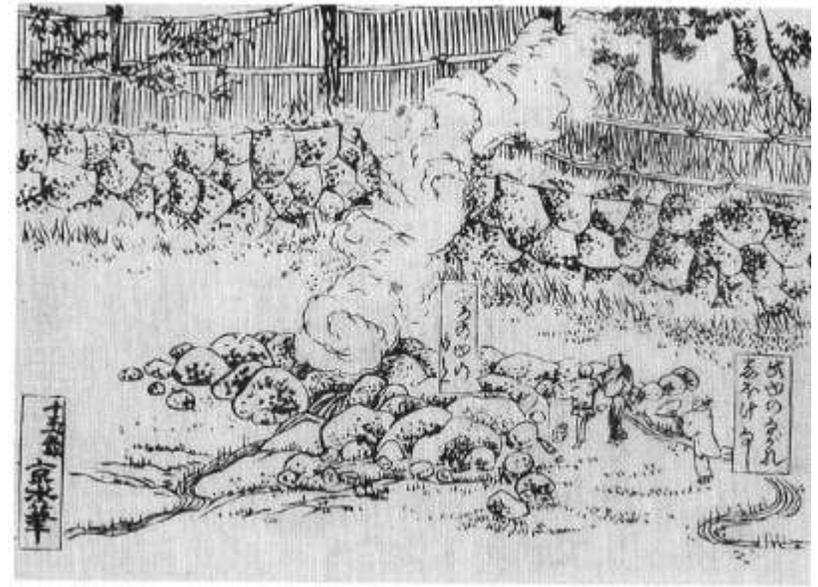
熱海温泉湯源沸湧之図(大湯)



平左衛門湯源（現在「平左衛門の湯」「小沢の湯」）



野中の湯

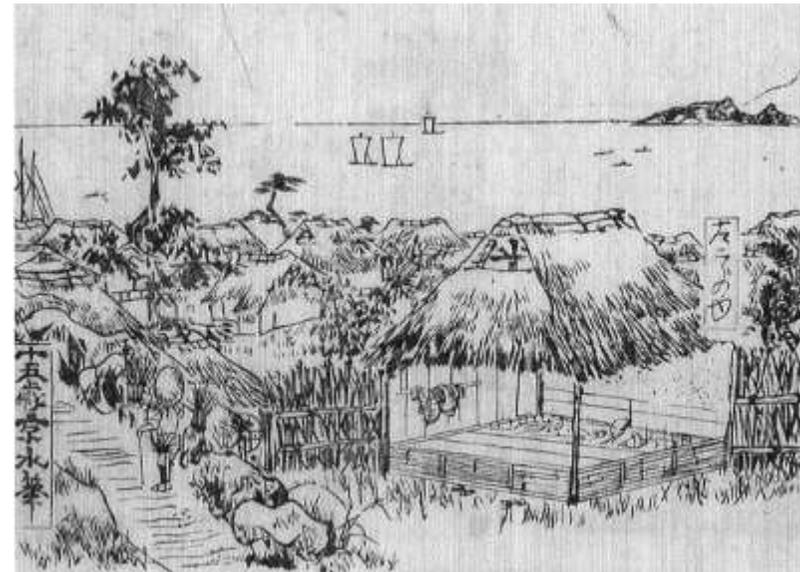


風呂の湯の源

現在は温泉ディスプレイとして見学することができる。熱海まち歩きガイドの会がご案内もしている。



河原の湯（現在「河原湯」）

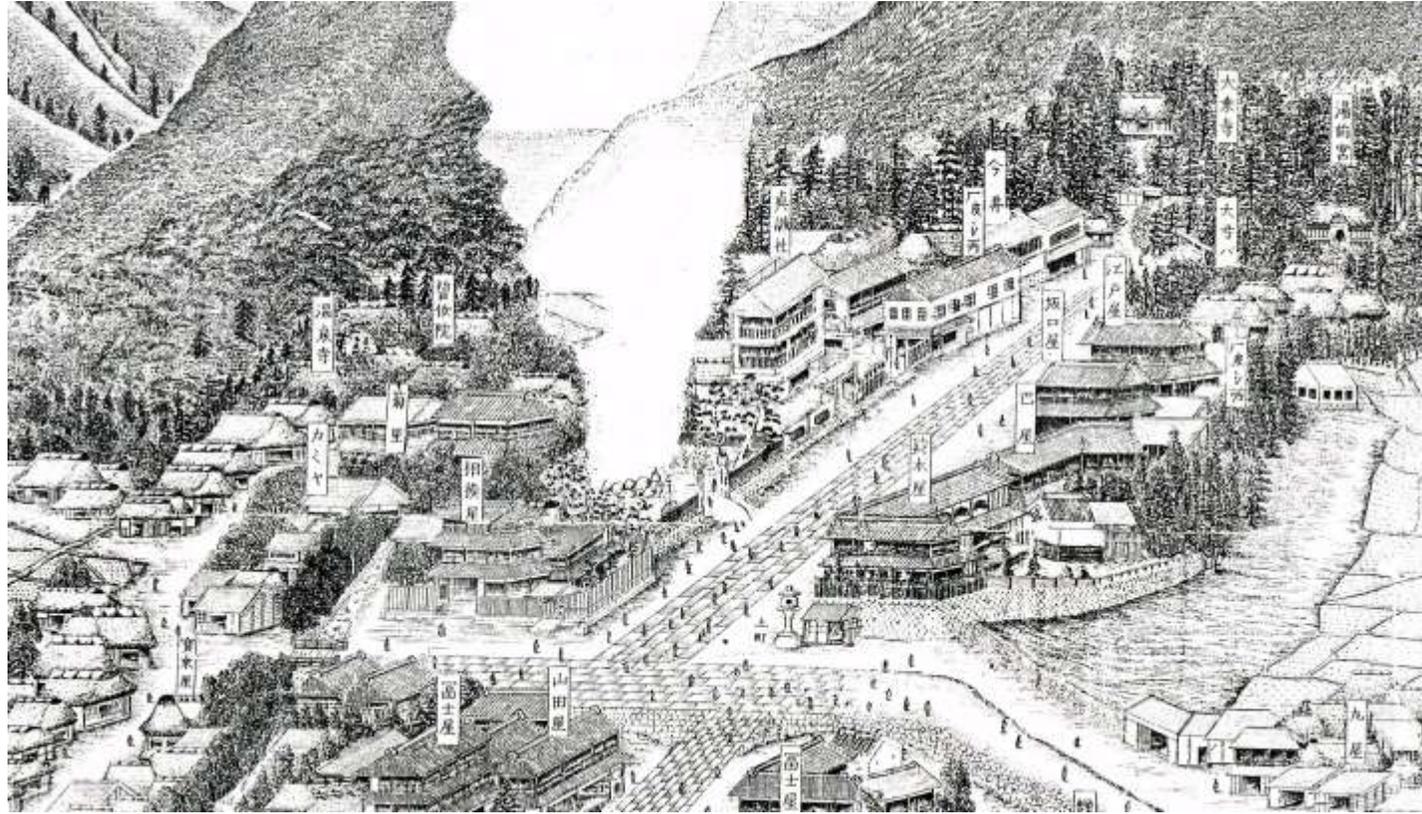


左二郎の湯（現在「左治郎の湯」「目の湯」）



清左衛門湯の源（現在「清左衛門の湯」）

大湯の分湯 集落の形成



本町通りや新宿に軒を連ねる二階建てなどの湯戸建築が、熱海村中心部の景観を大きく特徴付けていた。

これらは二階座敷からの眺望が特徴であり、海や初島の眺めが見渡せた。

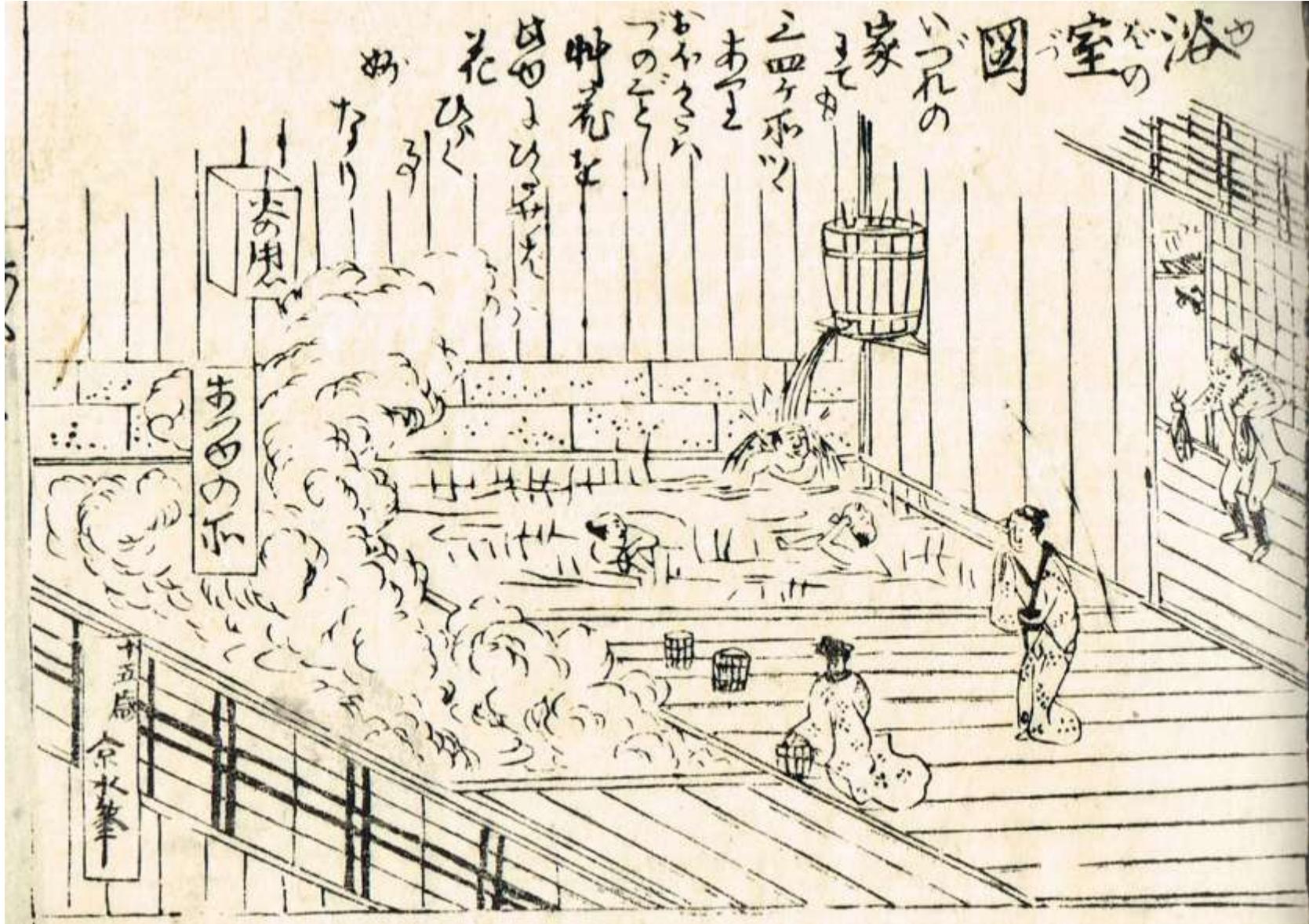


天保三年 今井半太夫の湯店と一碧楼 木村喜繁筆

客屋湯入の図 (熱海町家客亭之光景)



温泉に親しむ庶民を描いた熱海的情景 (歌川国安画)

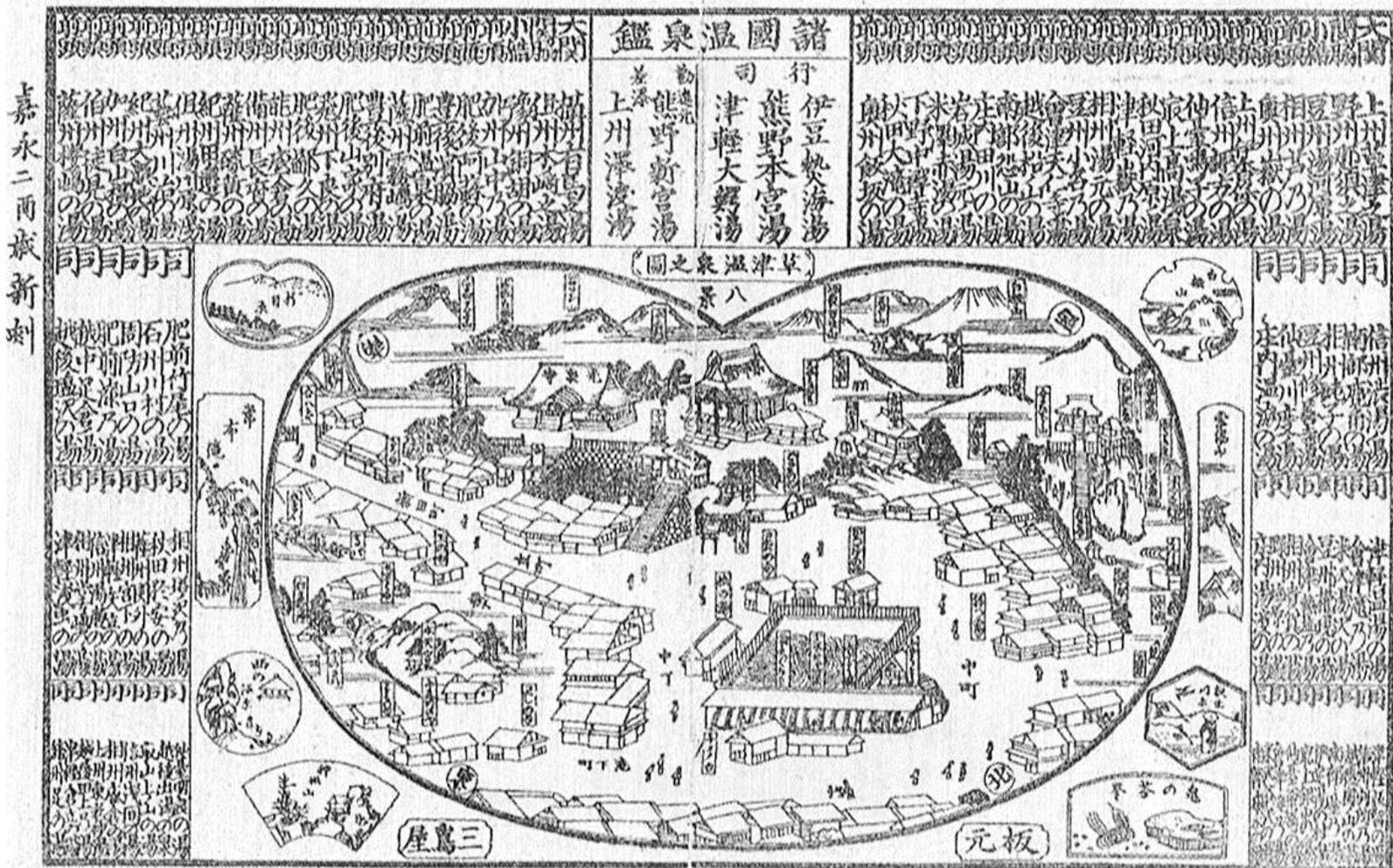


温泉入浴を楽しむの図

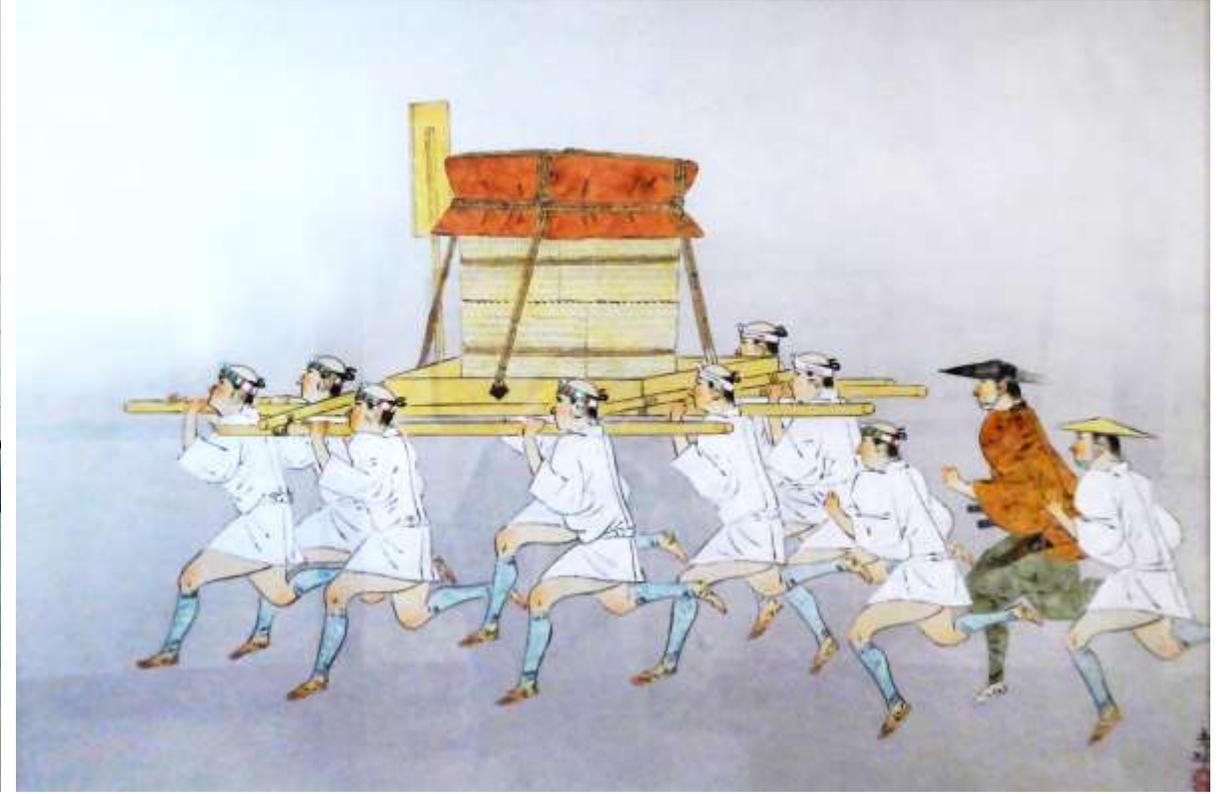
温泉番付

温泉番付での熱海は行司役

江戸から明治にかけて、相撲の番付にならった「温泉番付」が江戸や京都、有名温泉地で作られた。相撲の「江戸番附」が初めて発行されたのは、1757（宝暦7）年10月場所であった。江戸時代、熱海は一貫して行司を務めた。見る人を納得、権威づけるには行司、勧進元、差添が認める名湯、別格温泉地でなければならない。徳川家康愛顧の温泉地で、将軍への御汲湯も行ってきた熱海湯はその条件を十分備えていた。明治以降将軍の影響がなくなり地位は失われた。



御汲湯と湯汲道中



家康は熱海の温泉と効能を気に入り、病気がちだった吉川廣家に熱海の温泉五桶を送り届けさせた。以後三代将軍徳川家光、四代将軍家綱と長きに続く。その際には江戸から御汲湯奉行が派遣され、厳重な監督のもとで熱梅の湯が汲み出された。御汲湯が行われたのは大湯で、『御用は「湯戸」の主人に限られ、7つの作法に従い厳格に行われていた。十代将軍家治も熱海の湯を所望、2年間に229樽の湯が江戸城まで運ばれている。

大湯の御汲湯から 熱海温泉の湯樽販売へ



江戸へ運ばれる湯樽が積み上げられた今井本陣
『熱海道之記』醉月亭月齋作 部分

〈武田科学振興財団 杏雨書屋 蔵〉

図は江戸へ運ばれる湯樽が積み上げられた今井本陣の画。

献湯祭 温泉に感謝・繁栄を願う例大祭



現在湯前神社では、春と秋に例大祭を行い、温泉に感謝し、熱海温泉がますます繁栄することを祈願します。その時は、江戸城へお湯を運んだという故事を再現した『湯汲み道中パレード』、連合神輿渡御、古式ゆかしい『献湯祭』が行われます。



ご清聴ありがとうございました



当時の熱海梅園です。明治18年につくられました。
この梅園、梅を愛でる為のものではありません
ではその目的は？ 次回の講座にて・・・



令和3年度

オンライン講座

第18回
まちづくり
III

18

2021
12月
No.18

熱海ブルーノ・タウト連盟

タウト塾@熱海



No.18 END